

建設時評

伝統建材

一般財団法人 建築コスト管理システム研究所
 主席研究員 岩松 準

瓦生産激減という記事を目にした。割安なスレートなどの普及と地震に弱い風評が広まったため、生産量が最盛期の4分の1に落ち込んだとある。工業統計の瓦出荷枚数は、阪神大震災があった1995年までの合計15億枚の水準から徐々に減少し、2010年は5億枚を下回っている（次頁図は工業統計から）。

一面の瓦屋根が織りなす「葺（いらか）の波」は美しい日本の伝統的な建築文化の象徴だった。大学の恩師が「第五のファサード」というある建築家の言葉を紹介し、屋根のデザインの大切さを説いたことを思い出した。ふと筆者の住むまちを眺めたら、瓦屋根がほとんどないことに気がついた。

いろいろな統計や文献やウェブでの発信情報を調べると、上述のような事実が確認できた。瓦業界側としては、実物大の振動台実験による「ガイドライン工法」の優位性のアピールや、建築設計事務所へのCADデータの無償提供など懸命に取り組んでいる。昨年9月には、全国陶器瓦組合連合会や全国いぶし瓦組合連合会など関係4団体で全国統一組織をつくった。その趣旨は、瓦屋根にかかわる業界全体が危機感を共有し、製造・販売・工事の業種を超えた国民目線での活動により、日本固有の美意識に基づく誇りある伝統・文化の継承を図ることと説明されている。

* * *

瓦は伝統的な建材の代表例といってよく、その製造はつい最近まで家内工業の典型でもあった。運搬の事情からそれぞれの地域でむかしから焼かれていたのだ。北の庄内瓦から南の沖縄赤瓦まで全国各地に産地があり、事業所数は昭和40年代では4,000を超えていた。地域毎に色合い、性能、寸法に微妙な差があり、それが屋根葺き材として使われるので、地域独自の景観要素にもなっている。筆者には、京町家の一文字瓦の端正さや、能登半島の大判な黒瓦の家並みがとくに印象に残る。

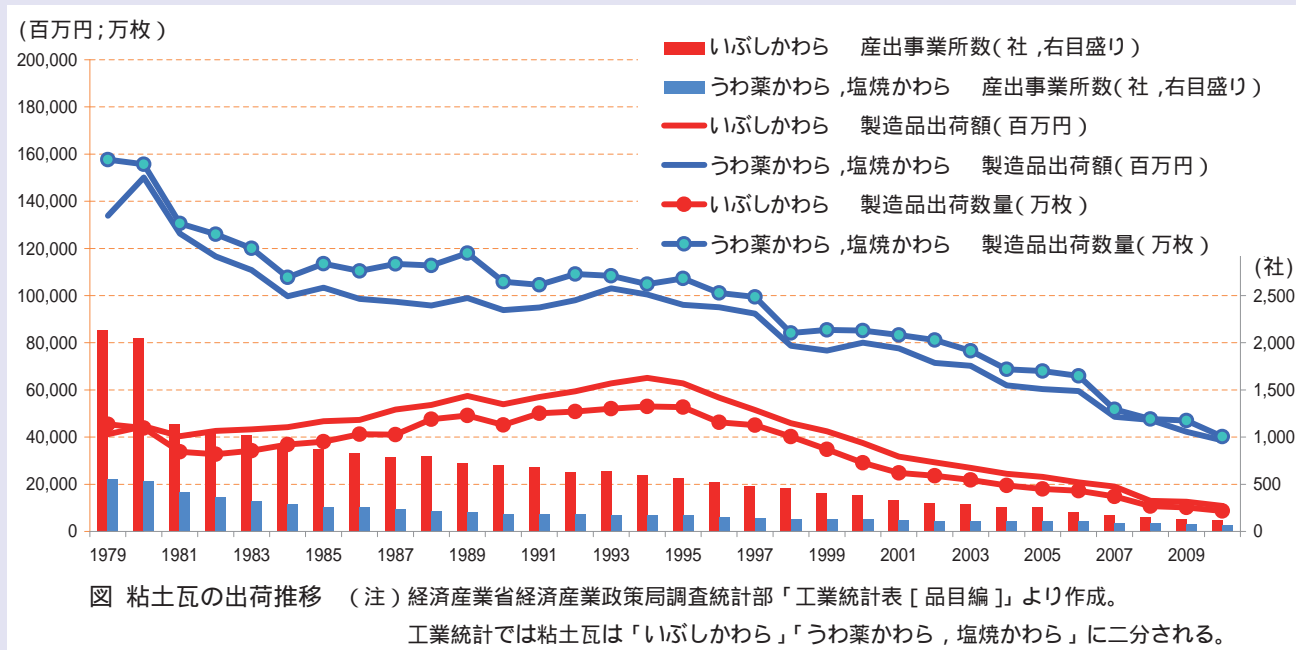
日本の瓦産地といえば、三州瓦（愛知県）、石州瓦（島根県）、淡路瓦（兵庫県）の3大産地が有名だ。三州は伝統的な燻し瓦に加え、赤褐色の塩焼瓦など色味のついた釉薬瓦で知られ、現在でも日本一のシェアをとる。石州は耐寒瓦を主とする陶器瓦（釉薬瓦）、そして淡路は関西以西で好まれる燻し瓦に特化しているようだ。

* * *

粘土瓦は約1400年前の飛鳥時代、仏教伝来とともに朝鮮半島から伝わった建材とされている。もっとも、中国大陸ではその遙かむかし、紀元前800年の西周の時代から使われていたという。この時代の古代瓦が描く瓦当文様は考古学ファンの想像力をかき立てる。金箔が押されていた信長・秀吉時代の瓦はマニアのコレクションの対象のようだ。ただし、近世に至るまでは、瓦が一般庶民の住宅に葺かれることはまれで、もっぱら仏寺など為政者側のものだった。

江戸時代までは、平瓦と丸瓦の組み合わせによる「本瓦」葺きが一般的だったが、両者を一体・軽量化した「棧瓦」が誕生した。第4代将軍家綱の時代の延宝2（1674）年、近江国大津三井寺での瓦師・西村半兵衛なる者の発明とされている。全体が波形の形状で、対角する位置の二角を切り欠いたもので、「簡略瓦」ともいわれた（ただ、この説に疑いをもつ建築生産の研究者がいて、オランダ棧瓦が平戸や出島から伝わったのでは、とする）。

第8代吉宗の時代、たびかさなる江戸の大火に懲りて、享保5（1720）年、庶民住宅の



瓦屋根の禁令を解いた。以後、防火に役立つとして瓦の使用を奨励した。当時は棧瓦葺きが一般化しつつあったことも、普及を容易にしたようだ。この江戸での瓦の需要をまかなったのが、幕府の直轄地・三河で盛んになった「三州瓦」だった。この産地には船便のきく好条件があり、また、家康が三河出身で多くの三河人が江戸にいた関係もあろう。今日でも三州瓦は関東方面での需要が大きい。

* * *

瓦の製造方法は、粘土の配合・混練・成形・乾燥の後に焼成する。この手順は古代から変わらないが、さまざまな技術革新により、性能や生産性を向上させてきた。燻し瓦は、それまでの素焼きに対して、燻化工程を入れることで酸化膜を素地表面に形成し、高い防水性能を得る。また、釉薬瓦は陶器のごとく素地に釉薬を施して焼成するが、釉薬の工夫でいろいろな色が出せるようになった。

また、明治初年には引掛瓦が生まれた。ロンドン万博への展示品として、工部省営繕課の考案した発明品で、引掛けを瓦の裏面にもうけている。これによって、土を下地に使う土葺きではなく、乾式の引掛け葺きが可能になった。焼成窯についても、古代からあった登り窯から、だるま窯、ガス窯、そして連続焼成が可能なトンネル窯へと進化し、製造能力の向上と不良品の減少をはかってきた。ま

た、真空土練り機の登場によって JIS 規格に適合した寸法誤差での焼成が可能になった。

* * *

図が示す産出事業所数や出荷額の推移をどうみるか。釉薬瓦と燻し瓦では平均規模が違い、前者が大きいことがわかる。釉薬瓦の事業所では、技術革新とコストダウンへの対応による生き残りを、生産設備と経営の大規模化で対処しようとしてきたことがうかがえる。一方、燻し瓦は、屋根施工業者がガス窯で必要分を月に何回か焼く例もあるようで、家内工業的側面が残存していたようだ。ただ、両者とも90年代後半からの下り坂は尋常なレベルのものではなく、このままでは消滅の危険すらはらむ。

瓦のほか、各地の伝統建材 銘木、銘竹、和紙、漆喰、漆、ベンガラ、畳、和風金物、鋳物、天然スレート、・・・の場合はどうか。建築部品は、現代人の嗜好変化、新建材の登場、製造技術上の革新、類似品との価格バランスなどに揉まれ続けている。ただ、薨の波に象徴される日本の建築美や文化は失いたくないものである。

【主要参考文献】

- 駒井鋼之助『粘土瓦読本』彰国社、1963.12
- 大阪建設業協会編『建築もののはじめ考』新建築社、1973.2
- 原田多加司『屋根の日本史』中公新書、2004.12